

第一話 裸ん坊の少年少女達

僕らの目の前に、裸の少年少女四人が並んでいた。裸というのは、何一つ身につけていないということ。まさに全裸。

おちんちんもお尻も丸出し。女の子のオマタもだ。僕はその姿に、ただただ唾然となるのだった。

時間を少しだけ前に戻す。

その日の朝、僕は父に連れられてとあるビルにいた。

僕が事前に聞いていたのは『キャンプグループの入会説明』ということだけ。

説明会場には僕らの他にも、何組かの親子がいた。

僕の他に、子供は男の子が二人、女の子が一人だ。

姉弟で参加している子もいた。

僕たち全員がパイプ椅子に座る。

すると、隣に座った男の子が話しかけてきた。

「よっ！ 俺、ミツル。ヨロシクな。小学五年生」

僕も答えた。

「僕はユウタ。学年は同じだよ」

早速友達ができたかなと思うと、ちよつと嬉しかった。

僕とミツルが名乗り会ったことで、子供達はお互いに自己紹介する流れに。

「アタイはマミっていうんだ。小学六年生。ヨロシク！」

唯一の女の子、マミがそういつてニカツと笑う。

どうやら、一番年上は彼女らしい。

マミの横でモジモジしている男の子はあきらかに幼いしね。

マミはその小さな男の子の背中を叩く。

「ほら、お前も自己紹介しろよ」

言われ、彼はおずおずと言った。

「ボク、カズキ……二年生」

どうやら、彼はカズキくんと言うらしい。

「二人は姉弟なの？」

ボクが尋ねると、マミが答える。

「おう！ カズキがインドアすぎるからさ。いつそのことと思って連れてきたんだ」

「ふーん」

すると、ミツルがマミに尋ねた。

「マミって、女なのによく参加するよなあ」

それはちよつと男女差別じゃないのかな？ 僕が思うと、ママも憤慨した模様。「なんだよ、女子が参加しちやいけないのかよ？」

「そういうわけじゃないけどさ」

「パンフレットには女の参加者の写真も載っていただろ」

「まあな……」

パンフレット？ 僕は見ていないけど……

そんなことを僕らが話していると、主催者らしき男性が会場に入ってきた。

壇上に立ったジャージ姿の彼は、僕らに話しかける。

「皆さん、こんにちは。本日は我が『ナチュラルキッズ』の入会説明会にようこそ」僕たちはおしゃべりをやめて、話を聞こうとした。

が。

「……と、固い話は大人だけでしましょう。お子様達は隣の部屋でナチュラルキッズ体験をしてもらいたいと思います」

主催者がそういうと、ちよつとお腹の出たおばさんが扉から現れた。

「お子様達は彼女と一緒に隣部屋へどうぞ」

おばさんは僕たちにおいでおいでと手を振った。

逆らう理由もないので、僕ら子供四人はおばさんに連れられ、隣の部屋に。

(幼稚園みたいだ)

隣部屋に入って、最初に思ったのはそれ。

そこら中にいろいろなおもちゃが置いてあって、まるで幼稚園のようだった。

床もカーペットが敷かれていて、部屋に入る前に靴を脱ぐように指示される。

壁には子供が書いたと思わしき、絵が貼られている。

(あれ、でも？)

絵の中には少年少女が描かれている作品もあったが、なぜかみんな裸んぼうだった。

扉が閉まると、おばさんが言う。

「みんな、こんにちは。私はミカっていうの。ここではマザーミカって呼ばれているわ。みんなもそう呼んでくれると嬉しいな」

マザー——母親。

小学五年生の僕でも分かる英語だ。

「とりあえず、みんな適当に座ってくれるかな？」

椅子はないので、みんなカーペットの上に座る。

「今日は、みんなにお友達を紹介するわ。みんなよりも、ちよつとだけ早く『ナチュラルキッズ』に入会した子達ね。」

先輩ってことになるのかもしれないけど、『ナチュラルキッズ』では先輩後輩とかそういう上下関係はナシよ。

みんな仲間、みんなお友達、そう思ってね」

マザーミカはそういつてニッコリ笑った。

その笑みはとても人なつっこくて、楽しそうな団体だなと思えた。

「じゃあ、みんな、入ってきて」

マザーミカが僕らが入ってきたのとは反対側の扉に向かって呼びかけた。

扉が開き、子供達が入ってくる。

その姿を見て、僕は啞然となった。

入ってきたのは四人。

僕よりも年上っぽい少年と、僕と同じ年くらいの少年少女、それにカズキくんと同じくらいの年の女の子。

なぜ、僕が啞然となったか。

答えは簡単。

四人が全員裸——それも全裸だったからだ。

「え、え、ええええ？」

戸惑う僕。

「なんで、裸なの!？」

思わず叫んでしまった。

その言葉に、マザーミカはちよつと困った表情。

「あれ、ひよつとして君、親御さんから説明されていないの？」

「説明？」

ミツルとマミも、僕が驚いていることにビックリしたという表情だ。

一体何がどうなっているのか。

困惑する僕に、ミツルがポケットから何やら取り出して押しつけるように渡してくれた。

それは細長い折りたたんだ紙。

大きく『ナチュラルキッズ パンフレット』と書かれていた。

そしてその文字の下には——

——浜辺で全裸の少年少女十人くらいが砂遊びをしている写真があった。

オチンチンやおマタを隠す様子もなく、ピースサインをしていたりもする

僕はさらに紙を開いてみる返す。

森の中や河原、あるいはここの会場のような場所で全裸で遊ぶ子供達の写真がいくつも掲載されている。

さらには町中を全裸の少年少女が自転車で走る様子も。

端っこの方に『ナチュラルキッズ』の説明も書かれていた。

『ナチュラルキッズ』

子供達があるのまま過ごす空間がそこにあります。生まれたときはみんな裸ん坊です。

裸ん坊こそが、子供達にとって一番元氣になれるのです。

海で、森で、川で、街で。

男の子も女の子も区別なく。

すべてを脱ぎして自然のままに。

ナチュラルキッズはみんなを歓迎します！

僕はもう、啞然呆然。

さつき、ミツルがママに言った言葉の意味もようやく分かった。

女なのにというのは、差別では無かったのだ。

女の子なのに裸になるなんて勇気があるなとか、そういう意味だったのだろう。

マザーミカが僕に話しかけた。

「困ったわね。無理矢理参加させるわけにもいかないし。ちゃんとお子様の説明してほしいってお願いしてあるんだけど……」

えっと、キミ名前は？」

「ユウタです」

「そっかあ。説明されていなかったなら仕方が無いわね。パンフレットを見てみて、ユウタくんはどうしたい？」

「え、それは……」

「参加するのが嫌だって言うなら、ここで帰っても良いわよ。私たちはみんなに強制するのが何よりも嫌いなもの」

突然示された選択肢。

今すぐ帰るとも言いがたく、僕は困ってしまふ。

「……わかんないけど、その、参加するなら、僕も裸に……？」

マザーミカはちよつと首をひねる。

「基本的にはそうだけど、今日はお試しだから無理には脱がなくてもいいわ。もちろん、他の子達もよ」

マザーミカの言葉に、僕はちよつと悩みます。

裸の四人を見て、それからミツルやママを見た。

ミツルとは友達になりたいと思う。

それなら、すぐに帰るべきじゃない。

裸の女の子なんて、そうそう見れるもんじゃない。

僕だって男子だ。

女の子の裸には興味がある。

もしかしたら、ママの裸も見れるかもしれない。

僕自身が裸になるっていうのは抵抗があるけど。

今日のところはその必要もないっていうなら、別に慌てて逃げ出さなくてもいいんじゃないか。

「わかりました。とりあえず、お試しは参加します」

僕はそう言ったのだった。

第二話 ナチュラルキッズの自己紹介

目の前に並ぶ、四人の少年少女達。

四人とも全裸で、恥ずかしげもなくおちんちんやオマタを丸出しにしている。

マザーミカは全裸の少年少女達に言う。

「それじゃあ、まずはこっちの四人から自己紹介しましょうか。」

『ナチュラルキッズ』に入って楽しかったこととかもお話ししてくれるかな」

すると、一番年上の少年が「はいっ！」と手を上げた。

「じゃあ、俺から」

そういった少年の股間には立派なものがぶら下がっている。

僕のそれと違い、毛も生えているし大きい。

温泉とかで大人のおちんちんを見たことあるけど、彼のおちんちんはすでに大人と同じくらい成長している。

「俺はマサヒロ。中学二年生だ。『ナチュラルキッズ』は残念ながらあと一年半くらいで卒業だけど、楽しい思い出ならいっぱいあるな。」

俺が入会したのは六年前。キャンプとか、海水浴とか、山登りとか。すっげー楽しかった」

マサヒロの感想は、普通のキャンプサークルとかでも出てきそうな言葉だ。だけど、問題なのは……

僕が一番聞きたいことを代弁してくれたのは、マザーミカだった。

「裸になるのはどう？ 恥ずかしくなかった？」

「別に恥ずかしくないぜ。最初の時はまだチビだったし、ここではそれが当たり前だし。でも、裸になると、なんつーかな、自由爽快？ すっげー、気持ちいいんだ。」

普段よりもずっと自分が解放された気分になる。

お前らも体験してみれば分かるよ」

マサヒロは本心からそう言っているらしい。

確かに裸ん坊になれば色々気持ちいいこともあるのかも。

僕は少しだけそう思っている自分に気がつき、でもすぐに思い直す。

やっぱり、お風呂でもないのに人前でおちんちん丸出しながら変だもん。

「マサヒロ、ありがとう。じゃあ、次は……」

マザーミカがのこる三人に目をやると、一番小さな女の子が

「はい、はい、はい」と両手を挙げてアピールした。

「私がじこしょーかいするのー」

「OK、じゃあ、次はマナツキね」

女の子はマナツキちゃんというらしい。

もちろん、彼女も全裸。

小さな子とはいえ、オマタを隠すようすもまったくない。

「わたしねー、マナツキって言うのー。小学三年生だよー。よろしくですー」
彼女は語尾を伸ばす癖があるらしい。

それを聞いていて、僕は少しだけ変な気分になってしまう。
目の前に全裸の女の子がいる。

健康的に日焼けした女の子が、無邪気に両手を広げてすべてを見せているのだ。
僕も健康な男子として、当然の反応をしてしまうわけで。

端的に言えば、僕のおちんちんがパンツの中で固くなりかけていた。

「うんとねー、楽しかったのはねー、川でねー、お魚釣ってねー、丸焼きにして食べたことー」

それは確かに楽しそうだ。

そういう活動に興味があるからこそ、僕はキャンプサークルだと聞いてここに来たのだから。

「あとねー、カズヒロくんのねー、おちんちんで遊んだのー」
は？ この子は何を？

僕はビククリしてしまう。

だが、その発言は無かったかのように自己紹介が続く。

「わたしー、おうちでも裸ん坊だよー。ママもパパもおうちでは裸だもん。服着るのは学校行くときだけ。服着るのって、嫌いだもん」

言ったのがこの環境で、しかも小学三年生でなければ『露出狂か!』というような話である。

それで、マナツキの自己紹介は終わったらしい。

「じゃあ、次は俺かな」

そう言って自己紹介を始めたのは僕と同年くらいの男の子。

彼のおちんちんは僕と同じく無毛。

だけど、僕よりも少しだけ大きい。

腰回り含めて全身真っ黒に日焼けしている。

「俺はナナスケ、小学五年生。別に七人兄弟じゃないんだけどな。親父がギャンブル好きで、ラッキーセブンってことでナナスケな。ま、今は母子家庭だけど」

いや、いきなりそんな重い話をされても。

と、マザーミカが補足する。

「ナナスケは私の甥っ子なの」

そうなのか。

「マザーミカは黙っていてよ。俺が自分で話すんだからっ！」

「はいはい」

「ま、そういわけで、俺の母もナチュラルキッズの運営に関係しているんだよ。だからさ、正直に言えば俺は自分の意思でここに来たわけじゃない。最初はな。」

俺が入会したのは三年前だけど、その頃はどっちかっていうと、TVゲームするほうが好きだったしさ。

全裸になるなんてありえねーとも思ったぜ。

きつと、お前もそう思っているんだろ？」

ナナスケは僕の方を見ていう。

その通りだけど、僕はどう反応したら良いのか分からず、結果として無視するよ
うな対応をしてしまった。

ナナスケは僕の反応——というか、無反応にお構いなく話を続ける。

「だけどさ。実際に体験してみると『ナチュラルキッズ』って楽しいことばかりだよ。さつきマサヒロも言ったけど、裸になって自然の中に行くとき、本当に自由な気分になれるんだ。」

もちろん、裸になるのは強制されたりしない。今日はパンツは脱ぎたくないと思
ったら、別にそれでもかまわない。

俺も、町中での活動の時は脱がないし、そういう子もけっこういる」

さつき、町中で全裸になっている写真もあったけど、それは強制ではないという
ことなのだろうか。

「だけどさ、服を脱いで遊ぶと、すごく開放的な気分になれるんだ。なんつーか、
それが自然だって言える。最初は抵抗あるかもしれないけど、騙されたと思って体
験してみるといいよ」

自分と同じ年の少年の熱弁。

僕の中で少しだけ心が揺れる。

一度だけなら体験してみてもいいかも。

今日だけ、この部屋の中だけなら……

そんな気持ちだが、ほんの少しだけ芽生えいた。

そして、最後の一人。女の子の自己紹介が始まった。

「私はジャスミン。小学六年生。母親はアメリカ人よ」

確かに、ジャスミンには少しヨーロッパ系の血が混じっているかもしれない。

※以下は製品版でお楽しみください

【特別編】スケベ少年育成計画

長谷川カイト。ミツルの父親で現在二八歳。

ミツルが産まれたとき、彼はまだ十代。

若くして子どもを作った……わけではない。

実のところ、ミツルは養子である。

ミツルは実の両親を三歳の時に亡くしている。

カイトはミツルの父親の弟だ。

カイトやミツルには他に親族がなく、カイトが引き取らなければミツルは施設に入れられただろう。

父親の遺産をもとに、トレイダーとして成功していなければ、幼子を引き取るのは難し買ったかもしれない。

在宅仕事で、ちゃんと収入があり、持ち家もあったので引き取ることができたというのが正直なところだ。

もつとも、十代のカイトがミツルを引き取ったのは、唯一の親戚を哀れに思ったから……ではない。

ミツルを自分好みのスケベ少年に調教するためだ。

カイトはロリコンであり、同時にシヨタコンでもある。

幼稚園児から中学生までの男女を心から愛する紳士なのだ。

ミツルを引き取った後、カイトはさっそくミツルの調教を始めた。

といっても、カイトは鬼畜ではない。

いきなりミツルに手を出して、犯してやろうなどとは思っていない。

カイトがミツルに行ったのは『スケベ少年育成計画』だ。

○一年目（三歳）：ヌーティスト写真集&動画を与える

『スケベ少年育成計画』一年目。

両親を失った三歳のミツルに、カイトが絵本の代わりにプレゼントしたのは海外のヌーティスト写真集だった。

さらに、幼児向け番組の代わりに、ヌーティスト動画を見せるようにした。

それらの中では、大人から子どもまで、皆が全裸で遊んでいる。

幼いミツルは、食い入るように全裸の老若男女を見ていた。

この当時のミツルは、まだ性的な興奮を覚えていたわけではないだろう。

「ねえ、ねえ、おじさん、なんでみんなハダカなの？」

※以下は製品版でお楽しみください

あとがき

どうも、シヨタ作家の名草です。

このたびは『ナチュラルキッズ く僕のヌーティスト体験く』のサンプルをダウンロードいただきましてありがとうございます。

本作は、pixiv Fanboxならびにファンティアで支援者様限定コンテンツとして連載した作品をまとめなおしたものです。

今作のテーマはシヨタっ子&ロリっ子ヌーティスト！

ちびっ子は皆裸ん坊で遊んじゃえばいいと思うよ！

今後、pixiv Fanbookとファンティアで第二部の連載を検討中です。
のろのろ連載ですが、ご興味があればぜひ。

それ以外にも無料小説含めて色々連載しています。

もしよかったら見てみてください (露骨な宣伝)

<https://nagusa-syota.fanbox.cc/> (Fanbook)

<https://fantia.jp/fanclubs/62051> (ファンティア)

※2021年3月現在のURLです。

※本作の著作権は名草にあります。無断アップロードなどはおやめください。

※コピーや印刷は私的利用の範囲内のみでお願いします。

※本作はフィクションです。